



# 諏訪湖通信80号



令和7年2月20日号 発行: 諏訪湖創生ビジョン推進会議

## 諏訪湖における持続可能な漁業振興に係るワーキンググループが開催されました

令和7年1月9日(木)に諏訪合同庁舎にて第2回ワーキンググループが開催され諏訪湖の生態系に関する関係機関の取組報告や研究発表が行われました。概要を報告します。

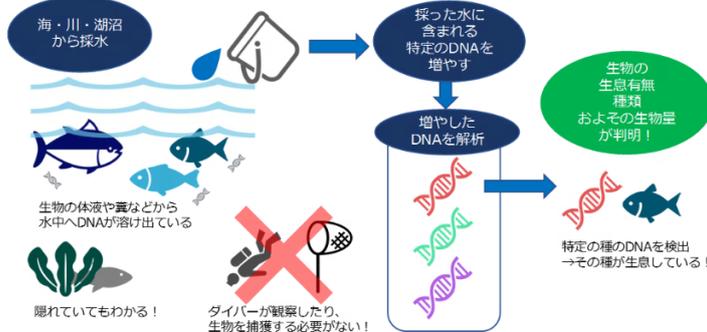
○県機関からの報告

- ・外来魚駆除(諏訪農業農村支援センター)  
電気ショッカー、刺し網による採捕・駆除 約1.4ト( R6.12時点、R5実績:約2.7ト)
- ・魚食性鳥類の追い払い等(林務課、諏訪農業農村支援センター)  
追い払い花火(100日間)の他、釣り仕掛けによるカワウ捕獲の試行(諏訪湖通信78号参照)
- ・ワカサギ採卵の安定化(水産試験場諏訪支場)  
ワカサギの産卵は2月上旬から3月下旬が盛期といわれているが諏訪湖では5月の産卵も見られる。従来は河川へ産卵遡上したワカサギを採捕・採卵していたが、昨今は産卵遡上が多く見られず採卵事業が不調となっている。湖内で親魚を採捕し、水槽内での自然産卵、採卵する手法を実施。この他、ワカサギやテナガエビの資源量の推定方法にかかる調査研究についても紹介があった。
- ・人工浮き漁礁の設置後について(諏訪農業農村支援センター)  
R5 県民参加型予算を活用した事業(諏訪湖通信第68号参照)で R6.1 に設置完了した人工浮き漁礁の早期の効果発現の取組として漁礁に生物がより棲みつきやすいように人工産卵藻を設置(全9基に設置)。



(R6.1 設置時の浮き漁礁) (R6.9 産卵藻設置時の浮き漁礁)

・諏訪湖の生物調査について(諏訪湖環境研究センター)  
環境 DNA 分析技術を用いた魚類分布調査、水草帯の魚卵調査の他、高密度ヒシ帯の魚類・エビ類調査に着手。



(環境 DNA 調査イメージ図、図は(株)建設技術研究所 HP から引用)

○湖底泥(=有機物の集積所)の調査(信州大学平林教授)  
過去100年前まで調査データを遡ることができ、現在のデータと比較することができるのは諏訪湖の特徴。魚の餌であるユスリカの幼虫の泥の表面の生息密度について約40年前の調査データを参考に試算すると現在は1/100程度。餌が減っていることから魚の資源量も同程度に減少していると考えられる。諏訪湖の生産性も含めた状況を的確に把握するためには、水生植物の変遷やユスリカなどの生物の生息状況といった様々な研究データを集約していくことが大事。

## いばらき湖沼市民会議 諏訪湖と市民活動 環境保全と緩やかな連携を考える

霞ヶ浦をフィールドとするいばらき湖沼市民会議の要請に基づき諏訪湖クラブ沖野外輝夫会長が茨城県霞ヶ浦環境科学センターで開催されたシンポジウムの講師として参加し、現地の市民団体等との意見交換を行ってきました。

日時 令和7年2月2日(日)午後1時~午後4時30分  
場所 茨城県霞ヶ浦環境科学センター多目的ホール  
参加 現地の市民団体等約40名  
諏訪湖クラブ 沖野外輝夫、井上祥一郎、八幡義雄  
(リモート参加) 諏訪地域振興局企画振興課 大林輝圭



沖野会長講演の様子



会場内のパネル展示



シンポジウムのビラ

生憎の天気となりましたが霞ヶ浦の取り組みなどの説明を受けました。

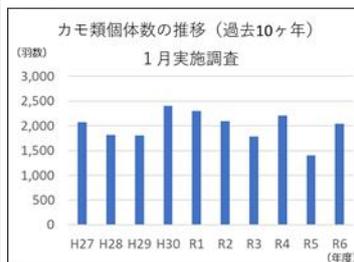
## カモ類の生息数調査を実施しました

1月14日(火)、諏訪湖及び周囲の流入河川、天竜川においてカモ類の生息数調査を実施しました。

この調査はカモ類の種類別個体数や季節的増減を把握することを目的に、平成5年から年3回、諏訪地域振興局林務課主体で実施しています。

調査は林務課職員、県鳥獣保護管理員、諏訪市職員の計11名が4班に分かれ、双眼鏡等を用いて種類別に数をカウントし、2,048羽(昨年同期1,402羽)のカモ類を確認しました。1月調査としては平年並みの個体数と考えられます。また魚食性鳥類ではカワアイサ287羽(昨年同期158羽)、カワウ138羽(昨年同期123羽)、カンムリカイツブリ76羽(昨年同期282羽)を確認しました。

今後も調査を継続し、個体数の推移を確認してまいります。



調査の様子

諏訪湖創生ビジョン推進会議は、「人と生き物が共存し誰もが訪れたいくなる諏訪湖」の実現を目指し取り組みます。  
事務局: 諏訪地域振興局企画振興課 TEL: 0266-57-2901